

2017. 7. 12 (水)

## 「愛する」という自由

打 樋 啓 史

兄弟たち、あなたがたは、自由を得るために召し出されたのです。ただ、この自由を、肉に罪を犯させる機会とせず、愛によって互いに仕えなさい。律法全体は、「隣人を自分のように愛しなさい」という一句によって全うされるからです。  
(ガラテヤの信徒への手紙 5章 13-14節)

人間は自由を知らない？

6月以来、「自由」を共通テーマにして、チャペルアワーを続けてきました。これまで先生方から色んなお話をお聞きしてきて、改めてつくづく思ったのは、「自由というのは本当に難しいもの」というか、「私たち人間は本当に自由を知っているのだろうか」ということです。「自由であるか否か」という以前に、「私たちは自由とはどういうものかを本当に知っているのだろうか。実は、知らないのではないだろうか」という思いが深まってきました。私たちが、「これが自由だ！」と思っていることは、実はそれほど自由ではないのかもしれない。逆に、そこに本当に自由があるのに、それに気づかずにいることがあるのかもしれないですね。

ニーナ・シモンというアフリカ系アメリカ人の女性ミュージシャンが歌った、『自由になりたい』という有名な歌があります。古い歌なので、皆さんはあまり知らないかもしれませんが、1967年、私が生まれた年に発

表された曲で、もちろん私もリアルタイムで聞いていたわけではありませんが、この曲の原題は“I wish I knew how it would feel to be free”というもので、「自由になるってというのはどんな感じなのか知りたい」という意味合いですね。仮定法が使われているので、そこには「現実にはあり得ないことを想像する」という意味が込められている。つまり、「自由というものは知ることができないかもしれない」といニュアンスが含まれています。ですから、この歌に流れるテーマは、「人間とはそもそも自由を知らない」ということだと言えるでしょう。

ニーナ・シモンというアーティストは、アメリカ合衆国での公民権運動に精神的に関わった人で、この歌もその関連から理解されることがあります。公民権運動の中での、アフロ・アメリカン（黒人）の人々の不自由にされた立場を示唆しているということです。しかし、この曲を書いたのはビリー・テイラーというジャズピアニストで、彼はこの曲を娘のために作ったと言われているので、そもそ

もは公民権運動と関係なかったかもしれませんが、もっと一般的な意味で、「人間が自由を知っているのはあり得ないぐらい、とって難しい」ということを歌っているのかもしれない。

私自身の体験から、「自分が自由を知らない」と最も強く感じるのは、頭では「この方がいいに決まっている」と思っている、それとは逆のことをしてしまう時です。例えば、私はお酒が好きで、友だちと飲みに行くこともあれば、自宅で夜お酒を飲みながら、本を読んだり、考えごとをしたりするのが至福の時間なのですが、「もうこれぐらいでやめておいた方がいい」と頭で分かっている、ついつい「もう一杯ぐらいいいか」と飲みすぎてしまい、翌日の朝がしんどくなったりすることがあります（笑）。つまり、「もう一杯飲む」という自由を享受するのですが、あとで「体がしんどい」という不自由を味わうことになり、後悔するわけです。まあ、これは卑近な一例にすぎませんが、頭・意識と体・行動が別であるという不自由をよく感じますね。

### 「自由からの逃走」と「自由への逃走」

「人間は自由を知らない」というテーマに関連して、有名な本があります。このテーマのチャペルなら必ずどなたかが紹介されるだろうと思っていたのですが、記憶する限り、まだどの先生も触れておられないかと思えます。それは、ドイツ出身の社会心理学者エーリッヒ・フロムの『自由からの逃走』という書物です。フロムという人は、ユダヤ系だったので、ナチスが政権をとったのちアメリカに亡命し、そこで研究・著作活動を行ない、

大学で教鞭を取りました。この有名な著作の中で、フロムは、人間が本当の自由を知らないことを、「自由からの逃走」と「自由への逃走」という二つの面から示しています。

一方で、人間は本当の自由から逃げてしまおうと言います。ここでの「自由」とは責任を伴うもので、自由な意志で努力して、他者のことを思ってよい社会を作っていくことです。そこに大きな喜びがあるのに、人間はそこから逃げ出してしまおう。そういう自由から逃走してしまう。そして、いわば利己的な自由、自分のためだけのつかの間の幸福という意味での自由へと逃走・逃避してしまうというのです。こうして人間は本当の尊い自由を知ることがないと、この著作において、フロムは、ナチスを支持して、第二次世界大戦へと突っ走っていたドイツ国民のことを言っています。彼らの心理がどういうものであったかを、「本当の自由から逃走し、かりそめの自由へと逃げ込む人間」という観点から分析しているのです。

今日お読みした聖書の言葉（ガラテヤ5：13-14）、このテーマのチャペルで何度も読んできたものです。この手紙を書いたパウロという人は、自由について、「肉に罪を犯させる自由」と「隣人を愛する自由」とがあると語っています。フロムが、人間がそこから逃走してしまうと指摘した尊い自由とは、ここでの「愛する自由」のことだと言えるでしょう。自分のためだけではなく、「他者のために」「他者と共に」ということを大切にしながら、考え、行動する自由。「肉に罪を犯させる自由」というのは、フロムによれば多くの人がそこに逃走してしまいがちな自由、つまり、「自分さえよければ」というところに逃げ込んでしまう利己的なつかの間の自由なの

でしょうね。

このように聖書は「自由とは、愛する自由である」と、はっきり宣言しています。逆に人間の不自由さは、「愛することができない」ということに最も顕著に表れると言います。「愛することができない」とは、他者を大切にできない、人を平気で傷つけたり、他者を自分のための道具や踏み台にしたりする、あるいは自分が得すること以外はまったく無関心、ということにほかなりません。

### 愛する自由を教えてくれた隣人

それに関連して、私の体験を少し話したいと思います。2002年から2004年まで、私は関西学院から留学の機会を与えていただき、イギリスのロンドンに滞在し、研究をすることができました。まだ小さかった二人の子どもたちを含めて、家族で渡英し、2年間生活しました。異国での生活で楽しいながらも色々大変でしたが、家族がいてくれたことで支えられると同時に、家のことや子どもたちのことなど、色々と家族のためにしなければならぬことも多い日々でした。

2年間はあっという間に過ぎて帰国の日が迫った時、妻と子どもたちは先に帰国し、私は後片付けをして、2週間ほど後に帰国することになりました。その時私は、「この2週間は、家族のことから解放されて、一人で自由にロンドンを満喫できる！」と、何とも不謹慎なことを考えていたのです（笑）。しかし予想外のことが起こりました。家族を空港まで見送り、家に帰って夕食の支度をしようとして台所に立った時、とてつもない寂しさが押し寄せてきて、何もすることができず、ソファに横になりました。よくわからないのです

が、おそらく「2年間暮らしてきたこの家で、この家族で住むことはもう二度とない」と実感することからくる、経験したことのないような寂しさだったのではと思います。

その時です。玄関の呼び鈴が鳴りました。ドラマみたいですが本当です（笑）。誰だろうと思って扉を開けると、そのアパートの隣の部屋に住むおじいさんが立っていたのです。リオさんというアイルランド出身の方で、普段からよく立ち話をしたり、時々私を家に招いてお茶を出してくださったり、親切にさせていただいていました。そのリオさんが、こう言うのです。「さっき家族を見送って帰ってきただろう。出ていくときも帰ってくるときも窓から見えていた。寂しいんじゃないかと思って見にきたんだよ。」

驚くと同時に心が震えました。今の自分のこの感情をこんなによく理解してくれる人がいる。そして、自分と一緒にいようとしてくれる人がいる。そのことに、ただ感動しました。そうしてまたリオさんの家に招き入れられ、紅茶をいただきながら、あれこれ世間話をしている内に、元気が出てきました。その時心の底から思ったのです。「イギリスではいいことも嫌なことも色々あったけど、この国でこんな素晴らしい人に出会えて本当によかった」と。そして、「自分も日本に帰ってから、こんな風に人に寄り添える人間になりたい」と純粋に思いました。

「家族から解放されて過ごす自由」という、とても利己的な自由を思い描いていた私が、思いがけない寂しさを体験した時、リオさんは「寂しい隣人に寄り添う自由」を選択し、行なってくれたのです。これはパウロの言う「愛するという自由」、フロムの言う「責任と決断を伴う自由」です。だって、家族が去っ

て寂しくて沈んでいる男のところになんて、面倒くさいに決まってますから（笑）。

最初に言ったように、人間はそもそも不自由で、自由とはどんなものか、知ってるようで知らないのですが、そんな人間が「他者を愛すること」、つまり人を人として大切にすることで、少しずつ自由とは何かを知るよう

になる。そういうことではないでしょうか。私たち皆、そういう体験をしてきたのではないのでしょうか。人から愛されることで愛を知り、自分もまた人を愛することを通して、私たちは自由になっていくのではないか。神様はそうして私たちを自由へと成長させてくださるのではないか。そう思うのです。

（社会学部教授・宗教主事）